

デイに「行けない」のではなく、「行きたくない」

理学療法士 根岸 康至

奥さんの熱い思いがこもったメッセージに目が覚める思いで聞いていました。

発症した頃の様子から BLG に出会うまでの生活、そして現在の思い……と一人の当事者として、その壮絶な人生を語ってくださいました。やはり当事者のお話は周囲のどんな話よりも意味があり、奥深く、そして人を動かす力があるように思います。

私は医療機関に勤めており、併設にデイケア(通所リハビリ)があります。長テーブルにところ狭しと座席が設けられ、一律に座り心地のよくなさそうな椅子が用意されています。リハビリ専門職としては、座らせきりにするのであれば、せめて利用者個人の体型に合ったテーブルや椅子の高さにするくらいの優しさがあっていいのではとも思います。(それとも座りきりにならないようにという施設側の配慮なのでしょうか……)

奥さんのお話にありましたように、現在のケアプランは、デイサービスに行くことが目標達成になっており、行政が作った枠の中でプランを組み合わせているように思います。しかも自治体によっては、訪問リハビリをデイに「行けない」人が利用するサービスと位置付けており、実際に訪問リハビリとデイの併用を指摘されることがあります。つまり、行ける人は全てデイを利用するという発想なのです。訪問リハビリはデイにつなげることが役割で、デイに行けるようになったら卒業というのでしょうか。デイに行けないのではなく、「行きたくない」という発想がないのでしょうか。まるで、行かないのが悪いとでも言っているようです。目的なく時間つぶしのための折り紙や塗り絵、北国の春は、お世辞にも楽しそうとは言えません。「10名いたら10通りのニーズがある」という言葉は、デイの在り方の根本を示しているようです。

「認知症になって新しい人生が開けた」という奥さんは、社会とつながるだけでなく、社会における自分の役割を見出し、発信なさっています。紙芝居の活動を通して次世代の子供たちに認知症を正しく理解してもらうことや人前で語るための自己学習など、バイタリティ溢れるお姿は、とても認知症状を抱えているとは思えません。

ただ、その発信や活動は一人ではできません。お話にもありましたように、当事者の活動を支援してくれる人が必要で、私たち周囲の人々がそのことに気づかなければなりません。当事者の生きがいの活動に寄り添うことができなければ、時間つぶしのデイと変わらないかも知れません。残された人生で何ができるか、自分の足跡が残せるかという奥さんの想いは、もはや自分のためではないと思います。ほかの認知症の人たち、これから認知症になる人たち、認知症を支える次世代の子どもたち、そして私たち社会のために残りの時間を尽くされているように感じます。

今回の講義では、奥さんが残りの人生で成し遂げるべく使命と捉え、その並みならぬ決意から、私が今まで感じていた「発信する」とは少し違ったように思います。VODを見終わった後も、そしてレポートを書いている今も「当事者たちが何の責任感も持っていないことが原因」という力強い、そして生きた言葉が頭から離れません。とても貴重なお話をありがとうございました。